



I-OWA マンスリー・セミナー講演より お金の過去・現在・未来（1）

講演： 岡本 和久

レポーター： 赤堀 薫里

お金について過去に起こったこと、現在の状態、そして、それが未来にどうつながっていくのか、大きな流れをこの三回のシリーズで皆さんに掴んでもらいたいと思います。お金とは「感謝のしるし」です。自分の欲しいものや必要なものを得ることができて、「ありがたい」と思うから、自分が持っている大事なお金を相手に渡してあげます。働くことも人から感謝されることによって、自分の中に感謝が貯まっていく。貯まっていった感謝が信用になります。これは企業も国も全く同じことが言えます。

日本における貨幣の歴史についてお話しします。日本では長い間、日本最古の貨幣は、708年に発行された和同開珎だと言われてきましたが、奈良の飛鳥池遺跡から富本銭が出てきました。さらに、天武天皇が即位し、富本銭を発行した683年に「今より以降、必ず銅銭を用い、銀銭を用いることなかれ」と日本書紀に書かれています。この銅銭とは富本銭のことで、銀銭がその前にあったわけです。それが無文銀銭です。668年頃には無文銀銭が流通していたのではないかとされています。富本銭を発行したのは、藤原京建設費用の調達だと言われています。



708年、和銅元年、今まで日本では銅が出ないといわれていたのに、武蔵野国秩父で銅が出たというニュースが入ります。これはとてもめでたいことで、年号も和銅と切り替えたわけです。しかし、実はそのような事実はなく、政府のプロパガンダでした。この年708年に和同開珎の銀銭を発行しています。同時に造幣局のようなものを組織として作りました。その3ヶ月後には、見た目も同じで価値も同じである和同銅銭を発行しています。そして和同銀銭を廃止し、銀銭を回収したのです。このようにいろいろな手段を使って朝廷は銀の価値の裏付けに基づく貨幣を、国家の権威の裏付けに換えていく大変な努力をしていったということです。

710年に平城京の遷都があります。和同開珎は平城京の建設費のために発行されました。この頃から貨幣の制度ができあがっていきます。穀(米)と銭の交換比率を公表しています。次に銭の流



長期投資仲間通信「インベストライフ」

通を図ることを目的に、銭をたくさん貯めた人に位をあげる蓄銭叙位令。勝手に銭を造ってはいけないという私鑄禁止令。官僚の給与の一部や、当時の税金だった庸・調を銭で払うことを認めます。このような矢継ぎ早の政策が実施されました。

生活の中に銭が浸透していきました。和同開珎は50年にわたり長い間使われました。708年和同開珎が発行されて以降、皇朝十二銭という銭が12回、次から次へと発行されていきます。富本銭は藤原京。和同開珎は平城京。そのあと平安京ができて、公共投資等のために必要なお金を発行していきました。和同開珎の次に発行されたのが萬年通宝というお金です。銅の量は和同開珎の1/10ですが、同じ価値での流通をはかり、税金で和同開珎が戻ってくると、萬年通宝を出して、少ない銅の量でより多くのお金を生み出していきました。12回の発行分、毎回、銅の量を1/10にしていきます。

一番大きな問題は、この改鑄が民衆の利便性ではなく政府都合の発行であったということです。しかし、これを続けていると銭の信任は低下し、銭と共に米や絹や麻が貨幣の代わりに使われるようになりました。貨幣の発行を繰り返したため、貨幣の価値の支えである国家の信用が薄まってしまい、モノの価値に回帰することになったのです。

結局、お金はモノの価値に対する信頼によって始まっていますが、モノの価値以上の額面のお金を発行して、それを貨幣として使おうとするには、一般的には政府の権威が必要です。権威は信用がないと権威にはなりません。最初はいろいろな人が発行していたお金が、朝廷に統一されて、それが信長や秀吉の時代から武家政府に移っていきました。

講演では、お金が誕生するまでの過程や、物品貨幣の性格を持つ西洋のお金(金・銀)と名目貨幣の性格を持つ東洋のお金(銅)について。また日本は東洋としては例外的に物品貨幣(銀)であったことの解説。戦費調達のため、紙幣に切り替えた南宋や金、モンゴルから余った銅銭が日本に流入してきたこと。日本に紙幣に近い存在である割符(さいふ)の登場。16世紀から世界的シルバーラッシュが起こり、世界のグローバル化が進んだことの説明。さまざまなお金に関するお話がありました。最後に、金・銀・銭と3貨体制が始まり江戸幕府へつながる信長、秀吉の通貨政策の解説をしてくださいました。第二回は江戸時代から明治の初期までのお話だそうです。